一般演題 透析の見合わせについて

2. 「RRT 説明における看護師の役割」

東京医科大学病院 看護部[1)]、腎臓内科[2)]

〇高橋 千恵子[1)]、天摩 菜々恵[1)]、飯田 直江[1)]、菅野 義彦[2)]

意思決定支援での患者の関わりを通して、RRT 説明の見直しと CKM について考える機会となった症例について報告する。

【症例】A 氏 83 才 男性 原疾患:糖尿病性腎症で当院腎臓内科外来通院中。

【経過】RRT 説明の際は、療法選択についての意志表示はなかったが、外来で血液透析を選択する意志を確認した。その後 CKM の希望あり再度面談を行い、血液透析の希望あり。患者は、症状の増悪に対して薬でコントロールできると考えていた。掻痒感が増悪し、耐え難い状況になったため、血液透析導入を決意した。

【結論】RRT 説明の際に、RRT を選択しないことでの利益と不利益をしっかり説明できていなかった。そのため末期腎不全のどのような症状の経過・苦痛があるのかを患者に理解してもらう必要があると考えた。また症状が悪化することで、患者の意志が変化することを体感した。今回の事例を通して、CKM を取り入れた説明内容を再検討する必要性があることがわかった。今後も継続的に介入し患者の状態に合わせた SDM を実践し支援していく。